

発行日 \*\*\*2012年12月20日

皆様からの投稿をお待ちしております

e-mail:akutagawa\_dayori@yahoo.co.jp

\*\*\*\*\*

一部50円です

\*\*\*\*\*

## 「芥川だより」再出発 ー気分も新たにー

真夏の昼下がり、もよりのJR茨木駅からバスやタクシーを乗り継ぎ阪大病院まで、私を励ますために労をいとわず通っていただいた方、病に苦しむ姿を見るに忍びないから、と手紙で私を気遣い、絶望の淵からすくいあげようと苦心してくださった方など、今回の入院に際してほんとうに多くの人から励ましやお見舞いを頂戴しました。

2012年7月、10万人に一人という難病に身体がむしばまれていることが判明し、私は先行きが極めて不透明な状況で入院しました。毎日を投薬治療で過す退屈で退屈で仕方がない入院生活を送ることになったのです。ベッドに寝て天井を見上げながら、「どうして、オレはこんな病気になったのか？」と幾度も自問します。すぐに「考えたらあかん、考えたらこの病気に負ける。考えない事や」と思い直すのですが、また悲観的な想いが浮かんでくる、そんな毎日のくり返しでした。そんな悶えあえぐ日々の中で、私は宝物に気づいたのです。

高齢者は弱者だ、そのように接しなければいけない、と当たり前のように考えていました。たしかに身体は衰えているのですから弱者なのですが、年老いた方々の見舞いを幾度も受けるに従い、私の想いは少しずつ変わり、認識がたいへん浅はかだったということに気づいたのです。みなさんが私に注いでくれる眼差しは温かく、深い優しさをたたえていました。多くを語らず、私の一方的な話に耳を傾けてくれたのです。こんな幼児のような私をそのまま受け入れてくださったおかげで、みなさんが帰った後、病棟のベッドに横たわり天井を見上げた時、晴れ晴れとした気分が変わっていました。病身の私に心をくだいてくださった友人・知人のみなさんは、私にとって母のように、また兄や姉のように、私のわがママを許し見守ってくれていたのです。私を元気づけるためにわざわざ、暑い昼下がりにもかかわらず来てくれたんだ、と思うと、目頭が熱くなりました。

みなさんの励ましや祈りが束となって私の身体を支え持ちこたえさせてくれたおかげで退院できたんだ、と思えてならないのです。私にとって、なによりの治療薬になっていたのです。

みなさんの心づくしに報いる思いで、ふたたび『芥川だより』を発行し、お手元にお届けしてまいりたいと思います。次号より「闘病記」を連載してまいります。引き続きご支援を賜りますようお願い申し上げます。(嘉)



## 連載 爺捨て山 41

梵店主

入院中、主治医と幾度も爺捨て山の話をして笑われていたが、主治医は若く柔らかない頭脳の持ち主であったので、私と話しが合った。

医師「私は、あなたが、爺捨て山へ行くまでをサポートすればいいわけですよ」

私「そうです。最期の際には、私は自分勝手に、山奥に行つて死にたいわけですから……」

医師「最近ね、死ぬと分かった患者さんには何もしない。何もしない事が一番いい」

私「最後に、濁酒をたらふく飲み、酔っぱらいながら死にたいものだ。」

医師「そりや、それが最高ですよ。だれでも考えますよ。病院なんかで死にたくないですよ」

医師「私が、研修医であった時に、担当した糖尿病患者に言われて、気づいた事あるんです。私たち医師は病を治すことばかり考えているから、患者さんに、食事療法や禁酒禁煙などを強制しますが、その患者は、「私は、そこまでして長生きしたいとは思わない。私の優先順位は違う」と言われて、ああそうなんや。と妙に納得しました」

担当医とは、馬が会うから死ぬまでお世話になるつもりだ。

人のため いつも役立つ巳の年

長年の不況を抱えたまま、新年を迎えます。

何もせずして待っていても何の効きめもなく、運にまかせるとかいいます。

人生は風のしっぽのようなもので、長さでなく良さが大切、と誰かが言っていましたね。

確かに人生は長寿と共に良い一生、楽しい人生であることを求めますけれど、過ぎし一年を振り返ると、みんな後悔や恥かしい事が多いのです。

しかし、嘆いていても向上が望めません。あの人が、この人が、指しても自分の心の中にも、潜んでいることを見つけた時に、ホッとすることです。

そして自然に笑顔が。笑う門には福来る、というけれど、福の神が来たから、ニコニコするのはなく、福が来るか、来ないうちに、先ず笑顔で人や物に接すること。そんな難しいことはありません。

物事は、すべて始めが大事で、シヤツでも最初のボタンを掛け違えると、どうしても、まともに着られないように、お正月も歩み出しが狂うと、また一ケ年を誤る結果になり

得ないのです。

お互いに、どうか今年のゴールドプラシをしっかりと立てて歩みたいものです。

一心寺の参道にて

店員さんとの対話から

「貼るカイロより真綿を」なつかしいなあ。真綿なんて。店前にて、そつとさわつた。

「いらつしやい」の声にのせられて。

「この真綿ねえ、背中にのせたいのだけど、ズリ落ちてくるし、どうしたらいいかなあ」と半分ひとりごとを言う私。

それを立って側で聞いていた店員さん。

「背中にのせたら、動かないから大丈夫」

「私は、のせたまま一日動くよ」

「動いても大丈夫」

「あんた、自分の体にのせたの」

「いいえ、でも買っていきなせえ」

その強引き、とうとう買ってしまつた。

早速、家で実験、鏡の前で。姿をうつして真綿をのせて動いた。そしてわざと体をゆすつてみた。ピタッと、ヒルがくつついたように動かない。そして暖かい。

もうけた、これで暖かい冬を越せるで、と大満足の私です。



最近思うこと

熊吾郎

伊勢神宮は25年ごとに遷宮ということで、新しく神宮を建設し、寄付を募つて一大行事が続いている。25年というスパンは技術を伝承する上で限界に近い期間であろう。1人の宮大工が一生に1、2回経験するだけだろう。いろんな産業において伝承していく必要のあるものは、機械化や生活の変化に伴つてめまぐるしく変わっていく。

わたしは60定年退職をして5反余りの農業もやっているが、自分の健康なうちは続けられるが10年、15年先はどうなっているかわからない。今の日本の農業の担い手は65〜75歳ぐらいの人が一番多いようだが、先の見通しは全くない。農業だけでなく、漁業、林業などの一次産業は同じような状況である。次の担い手がいないという状況は他の分野でも同じように思う。次の世代にバトンが渡せな

い国は滅ぶしかない。どこもこの問題で頭を痛めていると思うが、そういう担い手づくりのシステムが壊れていることが問題である。ヨーロッパでは皮革職人や菓子職人などのマイスター制度がしっかりとっていると聞く。業界や地域でそういうシステムをつくり、国や自治体がバックアップする補助金をだすなどの手を大きく打たないと、この国の自然豊かな農山村の風景は消えて、フクシマの放射能汚染地域と同じ荒涼とした風景になってしまうだろう。

俳句

土田 裕

黒松や菰巻き終へて冬構え  
今昔を分ける鳥居や酉の市  
紅葉散るみな重なつてみな濡れて  
山茶花の落ちやまず咲きやまず  
大寺の鐘の音澄むや冬紅葉

\*\* お知らせ \*\*

今年もご愛顧頂き  
ありがとうございます御座いました

12月27日(木)

1月6日(日)

休みます

7日(月)より営業

当分10時から16時の  
営業で、木曜と日曜を休  
ませさせていただきます  
ご諒承ください

着物から服を仕立てます

糞~ぼん~

義兄の肺ガンが見つかって半年ほど過ぎた冬、まだ森宮の成人病センターに入

院していたころ、姉は、たまたま通りが

かったランドセル売り場で、新一年生に

なる女の子と、おじいちゃん・おばあ

ちゃんとおぼしき三人連れを見た。その

とき、姉は思ったそうだ。「うちにも孫はお

るけど、キヨズミ(義兄)には孫とラン

ドセルを買いに行く時間は残されてない

んやろなあ」。

うちの姉はヤクザをモノともしないぐ

らい気は強いのだが、そういうところは

やたらに気が弱いというか、暗いという

か。姉が悲観的になっても仕方がない

いぐらい、義兄のガンは厳しい状況だ

たのだが、あれから3年、義兄は再発で

はないとされる腎臓のガンを摘出したり

して、完全に健康とはいえないまでも、

まずまず元気に暮らしている。

すでに、会社は定年で辞めているので、

毎日が日曜日状態。定期的に病院には通

る。義兄にはそんな時間(寿命)は残され

ていないと気落ちしていた姉ちゃんだ

たが、その暗い予想に反して、ランドセル

を買いに行けるときがきた!

だが、運命は思わぬ伏兵を用意してい

た。息子のヨメだ。

ここからは、姉が息巻いて私に話したこ

となので、ヨメには悪いが、かなり一方的

な話である。

姉がプンプン怒って電話してきて、「ち

よつと、アンタ! 聞いてくれる?」。長

い話だったが、要約すると、ヨメが姉に電

話してきて、「ランドセルを言うたと言

うてくれてたけど、プレミアム付きやった

ら8万円ぐらいはすんねん。しやから、革

職人に頼んで、別注しようと思うねん」。

姉はキレた。義兄と孫と三人で、ランド

セルを買いに行く、それを楽しみにしてい

たのに。別注って! しかも8万って!

「ほんまにハラ立つわっ」と姉が言うの

も無理はない。「だって、あの話をしてん

で、あの子に」。義兄にはランドセルを買

いに行く時間はないかもしれないと思っ

たこと。ヨメはこの感涙話を「ランドセル

を買ってあげる」という話だと了解し、と

つととネットだかパソコンだかで調べて、

「革職人に頼む」という、ヨメ好みの展開

にしてしまった。

百歩譲って、ヨメは姉に「それでええか

な?」と聞いてきたのだと思うが、「ええ

かなも、くそもあるかいな。もう決めて

そうは思わない)。

んねんから」と逆上した姉は、「私、ハラ

立つたから、言うてん。そんなに高かつ

たら、妹にも応援してもらわなアカンか

ら、相談するわ! 勝手に決められへん

わ!」

ちよつと待て、姉ちゃん! 何でそこ

で妹(もちろん、私だ)のこをもち出

すのだ?

姉にしたら、「わかりました、その代金、

払います」とは言えない、言いたくない。

でも「何、考えてんのん! イヤやで、

そんなん。キヨズミとメイちゃんと三人

で買いに行くねんから!」という本音も

言えない。それで、妹に聞いてみる、と

いう、はた迷惑を顧みない、いかにも姉

ちゃんらしい、「待った」をかけたのだ。

ほんまに、ハラ立つ姉ちゃんである!

知るか、そんなもん。それが、私の本音

だが、人間っておかしいですね、実の姉

妹でも本音で言えない。私は、弱気に

こう言っている自分の声を聞いた。

「いいよ、じゃ、半分出す。それを、メ

イチちゃんの入学祝いつてことにさしても

らうわ」。

私がそう言っても、姉の怒りは収まら

なかった。可愛いキャラクターのついた、

ピンクやブルーのピカピカの文房具、メ

イチちゃんが欲しいもの、何でも買いな!

と

その夜、私はネットで「ランドセルの

相場」を検索してみた。ピンからキリま

でだが、まあ3万から5万ってとこか。

もちろん、ええとこの子はもつと高いの

を買ってもらうだろうが、うちは庶民中

の庶民だ。内心、思った。ヨメのやつ、

相場より3万円ほど高く言うてきてる

な。その分を私が負担するのか、やれや

れ。

私は自分に孫がいないので、今年の

春、若い仕事仲間の子供に、入学祝いを

買ったときは、本当に楽しかった。6B

の鉛筆とか、筆箱とか、色鉛筆とか。親

も子もすごく喜んでくれて、それ以上

に、私が嬉しかった。懐かしい気持ちも

味わえた。いまでも、下敷きつてあるん

だな、とか。こんなにカラフルではなか

ったが、文房具つてキホンは大して変わ

ってないとか。

だから、と言うのもおかしいが、メイ

ちゃんへの入学祝いは張り込むつもり

だった。可愛いキャラクターのついた、

ピンクやブルーのピカピカの文房具、メ

イチちゃんが欲しいもの、何でも買いな!

と言って、メイちゃんが喜ぶ顔が見たか

った。所詮、文房具だから、1万か2万

の世界だし、それで入学祝いになるし、

と思っていた。でも、不本意なヨメ好みのランドセルの半額なんていうのはイヤだ。全然、楽しくない。

しかも、後日、電話してきて、姉は怒りのランドセル話を続けた。「何がイヤって、メイちゃんの気持ちは無視されてんねん。メイはな、水色のランドセルが欲しいねん、って言うてやってんから。革職人のんは、茶色やねんて。」

茶色かあ。渋い色だが、公立の小学校に行く、普通の子供にふさわしい色かという、「違うやろ」と思ってしまう。なんでも、人氣子役の芦田愛菜ちゃんがTVで「マナは茶色がいい」とか言ってる、ブームになっているらしいが。

「まあ、茶色いうても、ワインレッドに近い色にピンクのステッチが入って、女の子らしいデザインにはなってるらしいけどな。」

だが、姉はこのとき、あっさりと言ったのだ。「革職人、人気らしくて、4月に間に合えへんねんて」。私は、「え？」と耳を疑った。「どうすんの、間に合えへんて。ランドセルなしで、メイちゃんは小学校に行かなあかんん？」

「そうちゃうか」って。うそでしょ、姉ちゃん。そんな話、聞いたことがない。

「そんなん、かわいいそうやんか。間に

合えへんかったら、注文したらアカンやろ。なんぼでも、どこでも売ってるやんか」。イジメられるきつかけになるかもしれない。ランドセルが届くまで、

メイちゃんは教科書を何に入れて持っていくのだ。風呂敷か？（これは冗談。いや、その時は冗談を言う気持ちにもなれなかった）。そして、姉は言ったのだ。「革職人のランドセル代の半分、出してくれんでええから、アンタ、もう1個、ランドセル、買うたつたら？」

姉ちゃん、それって変やろっ！と叫んだが、私は買おうと思った。ランドセルができるまで、だれか貸してくれる人はいないか（そんな人、いるわけない）、とか、新聞に出ていた、施設の子供たちにランドセルをプレゼントしている「タイガーマスク」さんに「うちにも一個、いただけませんか？」と頼めないか、とか考えたが、どれも期待できない。

かくなるうちは、ヨメの気を悪くしないよう、「上等の革では、雨の日は使わせたくないよね。なんか間に合わないみたいだから、安物を一個買っておいたらどうか。色違いの水色で。私、それを買わせてもらいます、入学祝いに」と言えば、カドも立たないか、と思っておそろおそろ電話したら、ヨメは言ったのだ。

「予定よりは遅れるんですけど、4月

にはもちろん間に合います。当然じゃないですか。アハハハ」。私は、いまま心底、姉ちゃんにハラを立てている。（A O）

## 悪夢ふたたび（1）

六年前、自民党政権が郵政選挙で獲得した数の力で、強行採決を連発したのは記憶に新しい。教育基本法改正法、国民投票法など、憲法に関連する法案をはじめ、改正イラク特措法、教育改革関連法案などなど、つぎつぎに強行採決していた。そして改憲へと突き進もうとしていた。その先頭に立っていたのは、誰に教わったのか、「戦後レジームからの脱却」とか「美しい国」などと聞こえのいい言葉を使いながら、本音は日本を戦争のできる国へ改変しようとする目ざしていた、あのケーハク右翼・安倍晋三である。その後いろいろあつて参院選で自民党は大敗し、政権を投げだした安倍の顔を見ることがもうないだろうと思っていた。

ところが、今秋、二度と見たくなかったケーハク安倍が自民党総裁に返り咲いた。そして、アメリカと財務省に魂を売ったか、洗脳されたか知らないが、ドジョウならぬ脳なしノブタが、自滅とも自爆ともいわれる解散、総選挙に打って出て、民主党は議席を四分の一に減らす

大敗、自民党は衆院で再可決できるほどの議席数を獲得した。つまり強行採決を連発したときと同じ状況になった。

安倍は、間違いなく改憲へと強行するだろう。連立するであろう公明党は、平和の政党としてどのようなふるまうのだろうか。安倍としては、ソリが合わない公明党ではなく維新の会なんかと組みたいところだろう。その代表は、維新の会を乗っ取って、相変わらず好き放題の暴言をわめきちらす、あのチンピラ右翼、政治的無能力者だ。このチンピラは憲法改正のために自民党と連携してもいいといっている。チンピラとケーハクが手に手を取り合つて、日本を戦争のできる国に変えてしまうことだけは何としても阻止したい。

戦争をできる国にするためには憲法の条文を変えなければならない。自民党の改憲草案を見よ。立憲主義とは真逆である。憲法とはそもそも、国民から国家権力に向かって発している法であつて、守る義務を負っているのは権力のほうである。自民党の改憲案は、権力から国民に向かって、「公」のためには国民は権利や自由は抑制しなければいけないといっている。本来憲法というものは国家権力を縛るものだけども、自民党の改憲案は国民を縛るものなのだ。（以下次号）